

第1日 第2会場—3

大村はまの「習字」教育に関する考察

長崎大学教育学部 鈴木慶子

キーワード：新制中学校、国語科習字、書くこと、単元学習、学習の記録

1. 研究の目的

本発表では、昭和20年代に大村はま氏が新制中学校で行った「習字」教育を掘り起こし、当時、氏が呈示していた「習字」教育の方向をとらえることをめざしている。

言い方を変えれば、本発表では、大村はま国語単元学習における「習字」を検討することとなる。

昭和20年代は国語単元学習が一気に開花し急速にしぶんていった期間であるとされる。

その単元学習を創始し、発展させてきた大村氏の当時の実践の中には、「習字」教育が含まれていた。

鳴門教育大学附属図書館に収蔵されている当時の生徒の

「学習の記録」から類推すると、大村氏の「習字」教育は習字教育を熱心に行う者のそれとはまったく異質のものであった。

この異質さが、当時どのように受け止められたのかをわずかにしか把握することが出来ていないのだが、現在の国語科書写には明確な指標を示してくれている。

以上のような問

題意識にもとづいて、昭和20年代に大村氏の行っていた「習字」教育を検討することとする。

2. 昭和20年代の「習字」の位置づけと用語のゆれ

本節では、昭和20年代に発表された4つ学習指導要領にもとづいて、新制中学校における「書くこと（習字をふくむ）」及び「習字」の位置づけを確認しておくこととする（[表1] 参照*1）。

昭和20年代に発表された4つの学習指導要領において、現在の書写に該当する領域を指す用語は、「書くこと」「書きかた」「習字」の3つが使

[表1] 昭和20年代における位置づけ

b 昭和22年版国語科編〔試案〕

旧制の中等学校の国語科		新制の中学校の国語科	
(一) 国語(とくに講読とも呼ばれた)	(一) 話すこと		
(二) 作文・文法	(二) つづること(作文)		
(三) 習字	(三) 読むこと(文字をふくむ)		
他面、「習字」は毛筆によって漢字やかなを美的に表現する技術として、芸能科に属するものと考えられていた。	(四) 書くこと(習字をひくこと)		
	(五) 文法		

目次	
第四章	
二 話しかた	
三 作文	
四 読みかた	
五 書きかた(習字をひくこと)	
六 文学	
第五章 文法	

d 昭和26年版国語科編〔試案〕

目次	
第二章	
一 聞くこと	
二 話すこと	
三 読むこと	
四 書くこと	

c 昭和26年版一般編〔試案〕

必修科目	
計	
国語	
175～280	910～1015
175～280	910～1015
140～210	910～1015

用されている。さらに、小学校もふめて前後の期間を見てみると、[表2] *2 によくなり、とても煩雑であることがわかる。

特に、[表1] 中にdで示した単元学習盛行の頂点に発行された「中学校高等学校学習指導要領国語科編(試案) 昭和26年改訂版」には、「ここで書くことというには、従来、作文・つづり方、習字・書き方などと称していたもの」とあり、作文との一体的な扱いを示唆している。

3. 新しい位置づけへの対応

管見によれば、前節で見てきたような位置づけに関する論考の提出状況は、[表3] *3 のようになる。

これを見ると、次のようなことがわかる。すなわち、単元学習がどんどん盛り上がっていった昭和26年版学習指導要領発行前には、新しい位置づけに対して、国語教育関係者の論考ばかりが見られ、単元学習の反省期に入ってやっと習字教育を從

[表2] 用語の変遷

	毛筆を使用する	硬筆を使用する	
国定I～IV	書き方		
国定V	習字	書き方	
	小学校	中学校	小学校
昭和22年版		習字	書くこと (書きかた)
昭和26年版	習字	習字	書くこと (書き方)
昭和33年版			書写

前から熱心に行っていた者の論考が見られるようになってきている。しかも、昭和27年以降のものには、早くも、系統学習の傾向がもたげている。

このような状況は、習字教育を従来から熱心に行ってきた者の、新しい位置づけに対する当時の困惑ぶりを容易に想像させる。

[表3] 「書くこと(習字をふくむ)」及び「習字」に関する論考の提出状況

年月	論考の種類	国語教育関係者の論考(著者名)	*	習字教育関係者の論考(著者名)	*
1947(昭和22).3	▲昭和二年版一般編	昭和23.6 全国中学教員指導者養成研究協議会記録(大村)	×		
1947(昭和22).12	▲昭和二年版一般編	昭和24.12 国語科カリキュラムにおける習字(安藤)	○		
	国語單元学習の盛行	昭和25.5 新しい国語教育の方法(飛田)	○		
1950(昭和25).9	△中間発表	昭和25.9 中学国語カリキュラムにおける「書くこと」の指導(大村)	○	昭和26.2 書道単元学習と評価法(上条)	○
1951(昭和26).7	▲昭和二六年版一般編	昭和26.10 国語科学習指導要領の実践計画 (第二章 中学校の国語科の計画 四 書くことの学習指導(野島))	○	昭和26.3 新習字教育必携(関西書道教育連絡協議会)	○
1951(昭和26).10	▲昭和二六年版一般編	(第八章 中学校に於ける習字の学習指導(大村))	○	昭和27.11 中学校における習字教育の理論と実際(習字教育研究会)	○
	国語單元学習への反省	昭和29.7 中学校高等学校学習指導法国語科編 (各論・第一章 言語技術の学習指導 三 書くことの学習指導(?))	○	昭和28.10 中学校の国語学習指導 (三、わたしの指導計画…習字の指導計画(足達)) (五、国語学習指導のこつ…習字の指導(石田))	○
	減表			昭和29.4 習字教育の方向(森原) 昭和29.7 中学校高等学校学習指導法国語科編 (各論・第五章 習字の学習指導(浅見))	×

*欄の「○」「×」の印は、単元案・授業案収載の有無を表す。

(1) 上条氏の豹変

本項では、[表3]の中で取り上げている上条周一氏の論考の変化を見てみることとする。上条氏は、昭和20年代に、習字・書道教育界の代表として教育課程審議会委員を務めたり、文部省著作中学校習字教科書『習字』(昭和24年発行)の手本筆者を務めたりしている。

管見によれば、上条氏は、『書道単元学習と評価法』において、新しい位置づけに対して習字・書道関係者の中では最初に口火を切っている。その口調は、「書道の教育も、国語教

育の一環として、当然この方向に同調してゆかなければならない。『ことばのはたらき』としての、『書く』でなければならない」として悲壮なほどである。

これに対して、『実践国語』第14巻第153号に収載されている「書道教育における将来の問題点(一)」では、「かく技術は、基本から系統的発展的に教え、且つ一定の時間を定めてくりかえしきりかえし身につくまで、長年月にわたって学習させなければならない」と確信を得たように述べている。

[表4]

2つの論の対立点	『書道単元学習と評価法』 (昭和26年2月発行)	「書道教育における将来の問題点(一)」 (昭和28年6月発行)
「書く」対象	ことば	文字自体
育成すべき力	ことばの働きとしての 「書く」力	書写力 書くことの基本技術
美的表現	美の追究に専念するという芸能的态度はとらない	美的表現は重要条件
綴ることとの関係	密接 同時進行的	全然違った性格 綴ること以前に育成すべき

(2) 大村氏の先導

大村氏は、昭和23年6月の全国中学教員指導者養成研究協議会(東京大会)において奥水氏が行った昭和22年版学習指導要領における「書くこと(習字をふくむ)」の領域に関する説明を、下記のようにメモしている。

三、よくわかるような書きあらわしかた、今までの作文、習字は特殊な才能のある者が、尊ばれるような傾向があったが、それは誤りで、相手によくわかるように書く、このことが作文でも習字でも第一で

ある。これからは、よくわかるようなものでなければ、美を感じなくなるであろう。新しい国語教育はこの面からも寄与しなければならない。

さらに、昭和23年10月から発足した「国語学習指導要領編纂委員会」のメンバーとなり、昭和26年版学習指導要領の趣旨をふまえて、「中学国語カリキュラムにおける『書くこと』の指導」を『実践国語』第2巻第6号(昭和25年9月発行)に発表している。

その中で、大村氏は、単元「会議のすすめ方」をあげ、「書くこと」の活動の広がりを例示している。単元「会議のすすめ方」は、タイトルどおり「話すこと聞くこと」に重点が置かれている内容であるが、驚くほど多様に「書くこと」の学習が場を得て適切に行われるよう組織されている。

この単元に関する生徒の「学習の記録」は、残念ながら、鳴門教育大学附属図書館には収蔵されていない。したがって、生徒の学習ぶりは見えてないけれど、この単元における「書くこと」の活動は、「少し乱れても、読める程度なら速いのがよいとき」をとらえている。上条氏を始め習字教育を熱心に行ってきました者は、やり過ぎてしまいがちな視点であろう。

4. 「学習の記録」による大村氏の「習字」教育

鳴門教育大学附属図書館には収蔵されている生徒の「学習の記録」をみると、普段の大村氏の「習字」教育の様子がうかがえる。

昭和 20 年代前半で、「習字」学習の記録が残っている単元を列挙すると、下記のとおりである。

昭和 23 年度 「やさしいことばで」
(深川一中 2 B)

昭和 24 年度 「級雑誌の作り方」
「手紙の書き方」
(目黒八中 2 A)

昭和 25 年度 「古典入門」
「読み書きの技術」
(目黒八中 3 A)

以上のうち、「古典入門」の一部で、「書くこと」の活動が主になっている部分を、大村氏は、新しい「習字」授業の提案として、昭和 25 年 11 月 25 日開催の「全国小中高等学校習字研究会」において公開している。

そして、後に、その際の感想を「参観者の言動が不快であった」とし、多

くを語っていない。生徒の記録にも同様の趣旨が残されている。

このことは、大村氏の提案が、従来の習字の授業観に囚われていた参観者には理解されなかつたということではないのだろうか。

以上の概略をふまえて、研究発表では、「4」について、具体的な資料にもとづきながら考察することとする。

なお、前館長の橋本暢夫先生(現在徳島文理大学教授)には、鳴門教育大学附属図書館における調査に関してご高配くださいましたばかりか、関係する文献をご提供くださいました。さらには、大村氏には授業の実際に及ぶ聞き取りまでしていただきました。ここに記して、深謝申しあげます。

注

*1 鈴木慶子(2000) 「新制中学校国語科習字授業に関する考察」
『書写書道教育研究』第 14 号(全国大学書写書道教育学会)p11 ~ 20

*2 同 上

*3 同 上